

変わっていく勉強スタイル

劉夢真

交換留学生 中国

子供の頃から、ずっと日本へ行きたいと思っていた。もっとも、それが勉強のためか、旅行かなど、明確な目標はなく、ただ日本へ行きたいと思っていただけであった。時間と共に、進学ストレスが次第に増えてきた。その結果、日本に行く夢を忘れた。だが、偶に深夜にこの夢を不意に思い出すことがある。大学では日本語を専攻し、日本へ留学する機会を得た。自分の夢を実現させるために、一生懸命に勉強した。

日本に来てから、生活が激しく変わっていく。

最も顕著な変化が勉強の面で現れた。中国で小中高校も大学も授業は伝統的な教育方法に従い、先生は知識を伝え、学生たちはノートをとる。常に「何々をやりなさい」や「何々をやるな」などと言われる。高校生の時、朝六時二十分から夜九時四十分までずっと学校にいた。一日中、勉強ばかりしていた。家に帰って、宿題があった。そればかりでなく、政治や地理や歴史などの科目を復習しなければならなかった。一ヶ月ごとに、試験があり、成績の順による掲示も告知板に貼られる。毎週様々なテストもあり、毎日暗記すべき内容もあった。疲れたが、大学に入るという夢を目指し、勉強には関係ないことをほとんどせず、楽しく充実して暮らしていた。国内の大学では時、先生は教壇に立ち、語彙や文法を教えてくれた。クラスメートとの討論があるけれども、大教室とも小教室（図 1-2 日本と中国の小教室）とも、席を動かすことができないため、グループ活動があまりない。一限目の授業は八時からで、毎日何回も授業があり、単語と本文を暗記する宿題もあった。いつも忙しく日本語の勉強に取り組んだ。

だが、日本に来た後、その勉強スタイルが変わってきた。

授業中、単に先生は教えてくれるばかりではなく、他の学生と一緒に討論し、皆の前で発表（図 3）するということもある。教員の質問に答える時や自分の見解を説明する時に、立たなくてもいい。それは中国で禁止されていることだ。中国では立つことを通じて、先生に対する尊敬を表す。それに、日本では学生たちをいくつかのグループに分けて、三人または四人でグループ活動を行う。一方、中国では、自分一人で勉強し、他人との繋がりがあまりない。授業時間を除いて、課外時間は自由だ。そのため、余暇に何をすればいいかわからない。例えば、寮にいる時、日本語のドラマを見るか、それとも日本語の本を読むか、それさえもよくわからない。自由な時間をどのように使っていいのかわからないのだ。さらに、図書館の開館時間は中国より短く、このような学習生活にまだ慣れていない。しかし、日本に来たからには、この一年間の留学生生活を大切に、できるだけ早く慣れ、自分とも今の環境とも適した勉強方法を見つけ、長足の進歩を遂げるべきだ。

日本に来て以来、勉強スタイルが変わってきた。両国の教育方法の違いからである。中国は古代の教育方法に従っているが、日本は中国の教育方法を参考するばかりでなく、欧米の教育方法も学んでいる。どちらの方法が良いかは判断できないが、ただ言えることは、これら全て実践から得られたその国に最も適した教育方法だということだ。

（図 1-2：日本と中国の小教室）

日本



中国



(図 3 : 初めての発表)

